ペスタロッチー教育賞
受賞者紹介

ネパール学校建設支援協会 In ひろしま　代表

松田（マツダ）　實（ミノル）氏

松田實氏は1941年に広島市に生まれた。歴史が好きで，法政大学文学部史学科に進んだ。1965年に広島に戻り，石田学園山陽高等学校に社会科教諭として着任する。しばらく世界史を教えた。しかしながら，当時は学生紛争のただなかで，大学も高校も必ずしも望ましい教育環境にはなかった。立て直しのために，1973年，氏は請われて同学園が運営する広島経済大学に移り，大学生の就職支援を本業とすることになる。その後，就職部長そして学生部長を務めた。社会人として恥ずかしくない卒業生を送り出すことが使命であると考えた。本業とともにネパールでの学校建設支援が15年も継続され，いまや101校目が計画されている。この活動も氏の強い使命感に支えられて達成された成果であった。

世界史を教えた経験がありながら，海外に出たことがなかった。松田氏はそのことが心にひっかかっていた。山登りが好きだった。どうせ出かけるのなら，ヒマラヤが見てみたい。1987年に夏休みを利用して軽い気持ちでネパール観光に出かけた。

実際，ヒマラヤは美しかった。しかし，麓に住まうひとびとは極度に貧しかった。とりわけ，残飯を口に運ぶ子どもらの姿が痛々しい。どうしてなのか。自分に何ができるか。氏は，ネパールの現状を調べ，何をすることがネパールのためになるのかを考え続けた。山村僻地に住むからといって最低限の生活が保障されなくてよいわけがない。可愛そうだからといって一回の施しを与えるだけでは，身勝手な自己満足でしかない。美しいヒマラヤを臨む山村のひとびとが貧しさに苦しむことなく過ごしていけるためには自分に何ができるのか。

観光旅行の際に土砂崩れに遭い，植林の重要性を痛感した松田氏は，1992年に学生を連れ立ってネパールへと向かう。植林作業の休憩場所として校舎の利用が許された。しかし，その建物には黒板などなかった。トタン屋根が剥がれ落ちていた。校舎の修復に15万円，新しい校舎の建設に50万円かかるという。近くの学校へ行くには4時間かけて歩かねばならない。親は字が読めないので，学校に行かなければ字を学ぶことができないのに。僻地の山村が貧困であり続ける構図を学校建設によって断ち切ることができるかもしれない。

松田氏は私財を投じ，日本国内に資金協力者を募り支援を継続した。一方，ネパール側には次の6条件を設定する。①建設土地の無料提供者がいる，②学校完成後は，政府，自治体から教員が派遣される，③識字率が低い，④経済的に困窮している，⑤建設スタッフを明確にする，⑥村民が一致して学校がほしいのだという意欲を感じる。この6条件は，支援側の自己満足ではなく，相手側の自立と継続を見通しての条件である。

15年も活動を継続するためにはさまざまなことがあった。現地人に現金を持ち逃げされたことも，ご自身が病気で倒れたこともあった。一時期は治安も悪くなり思うように支援活動ができなかった。それでも賛同してくださる方が少しずつ増えていった。学生部長時代は敢えて学生を連れて行った。日本と違うネパールを見ることで，また現地のひとのために働くことで何かしらを得るであろうことを確信していたからである。自分の小さな枠でしか考えることのできなかった学生が成長して社会で活躍する姿を見ることは何より愉快であった。退職した2004年には「ネパール学校建設支援協会 In ひろしま」を立ち上げた。2005年には成果が認められて，ネパール国王より勲章が贈られた。多くのひとに支えられていまや100校目が完成しつつある。

ペスタロッチーは「玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住まっても」（『隠者の夕暮』）人間としては異なるはずがないと信じていた。だからこそ彼は「周囲の民衆が陥っていたあの悲惨の源泉をせき止めたい」（『ゲルトルート教育法』）と願い，教育の力にその希望を託して努力し続けた。使命感をもち，教育の力を信じて支援活動に携わる松田實氏の姿はまさにペスタロッチーの精神に通じるものである。氏のこれまでの功績に対し，第17回ペスタロッチー教育賞を贈呈し，高く顕彰したい。